

令和7年度における
国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構
の業務の実績に関する評価に対する
意見(案)について

令和8年8月3日
総務省国立研究開発法人審議会

JAXAの業務の実績に関する評価 項目別評価総括表(令和7年度)

■【令和7年度における業務実績】 総務省担当分7項目について、JAXAの自己評価（B：7項目）は、妥当である。

評価項目名			R7年度		意見(案)
			JAXA自己評価		
			小項目 (参考)	大項目	
Ⅰ.研究開発成果の最大化その他業務の質の向上に関する事項					
Ⅰ.1.宇宙政策の目標達成に向けた宇宙プロジェクト及び研究開発の実施			B	B	
Ⅰ.1.1宇宙安全保障への貢献		b			
Ⅰ.1.2地球観測・通信・測位		a			
Ⅰ.1.3宇宙科学・探査		a			
Ⅰ.1.4地球低軌道・月面における持続的な有人活動		a			
Ⅰ.1.5宇宙輸送		c			
Ⅰ.1.6新たな価値を実現する研究開発及び分野横断的に開発・運用を支える取組		b			
Ⅰ.2.官民共創での宇宙利用拡大及び産業振興に資する研究開発等の取組			B	B	
Ⅰ.3.宇宙戦略基金の活用			B	B	
Ⅰ.5.宇宙航空政策の目標達成を支えるための取組			B	B	
Ⅰ.5.1システムズエンジニアリング／プロジェクトマネジメントの推進及び安全・信頼性の確保		b			
Ⅰ.5.2国際協力・多様なプレイヤー間のグローバルな共創の推進及び調査分析		b			
Ⅰ.5.3社会の理解増進及び次世代を担う人材育成への貢献		a			
Ⅰ.5.4情報システムの活用と情報セキュリティの確保		b			
Ⅰ.5.5施設及び設備に関する事項		b			
Ⅱ.業務運営の改善・効率化に関する事項			B	B	
Ⅲ.財務内容の改善に関する事項			B	B	
Ⅳ.その他業務運営に関する重要事項			B	B	

※ 評価をより効率的・効果的に実施するために、第5期中長期期間の業務実績評価から「Ⅰ.1.宇宙政策の目標達成に向けた宇宙プロジェクト及び研究開発の実施」及び「Ⅰ.5.宇宙航空政策の目標達成を支えるための取組」については第5期中長期目標の最小単位の項目ではなくまとめた単位で評価することとしている。また中長期目標の項目自体の見直しも実施しており、結果として、R6年度の27項目から、7項目に評価項目が減少している。

令和7年度における業務の実績に関する評価に対する意見（案）概要

主な意見の概要

■ 「I.1.宇宙政策の目標達成に向けた宇宙プロジェクト及び研究開発の実施」(「B」評価)

みちびき5号機の喪失による影響を除けば、宇宙安全保障への貢献に関する他の成果については高く評価できる。また、「1.2地球観測・通信・測位」、「1.3宇宙科学・探査」について、顕著な成果が複数生み出されている。宇宙輸送については、H3の打上失敗というマイナス要素はあるものの、総合的に勘案して全体としては「B評価」が妥当である。

■ 「I.3.宇宙戦略基金の活用」(「B」評価)

I期、II期ともに、現在は造成フェーズであり、目標とされている成果創出までは時間がかかる。宇宙戦略基金の運営基盤整備及び支援体制構築が着実に進められており、「B評価」が妥当である。

■ 「I.5.宇宙航空政策の目標達成を支えるための取組」(「B」評価)

国際協力については高く評価できる。社会の理解増進及び次世代を担う人材育成への貢献については、様々な取り組みがなされ一定の成果をあげているが、次世代人口が大幅減少しつつある状況下であり、将来的なJAXA人材の確保の重要性もふまえて、今後もこれまでのアプローチのままでよいかは検討する必要があると思われる。その他のプロジェクトマネジメント、情報システム運用、施設・設備管理については、着実に実施されており、総合的に勘案して全体として「B評価」は妥当である。

法人の全体評価に関する意見の概要

■ 2025年度は基幹ロケットの不具合等により打上げ件数が減少していることは否めない。一方、「I.1.2 地球観測・通信・測位」「I.1.3 宇宙科学・探査」等の分野では顕著な成果があった。

■ 「I.1.宇宙政策の目標達成に向けた宇宙プロジェクト及び研究開発の実施」は、宇宙輸送を除き、概ね当初計画を上回る成果を上げており、この点は高く評価すべきであると考える。また、「I.3.宇宙戦略基金の活用」についても、着実に立ち上げ、特に大きな問題なく、運営を開始した点も評価できると考える。

令和7年度における国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構の業務実績に関する評価に対する意見（案）

令和7年度業務実績評価				
I.1. 宇宙政策の目標達成に向けた宇宙プロジェクト及び研究開発の実施	自己評価	B	部会意見	B
	自己評価は適切である。 全体として、「B 評価」は妥当であるように思う。みちびき 5 号機の喪失による影響を除けば、宇宙安全保障への貢献に関する他の成果については高く評価できる。地球低軌道・月面における持続的な有人活動についても、HTV-X が成功したこと、ISS での突発的な変更に対応したことは評価できる。宇宙輸送における H3 の打上失敗というマイナス要素はあるものの、総合的に勘案して「B 評価」で良いと思われる。 ＜翌年度以降に向けた課題・指摘事項＞ ● 第5期中目期間評価において、S 評価（特に顕著）の基準を世界レベルとの比較に変更したことは、更なる高い目標意識を持って研究開発業務に取り組む覚悟を示したもので、高く評価できる。一方で我々評価委員の適切な評価作業の実施と第4期までの評価との関係性（不連続性）の明確化のために、業務実績等報告書の「評価区分」を適切に更新することが望ましい。また、年度計画においても、目標とする世界レベルを具体的に表記できるとよい。 ● JAXA は世界レベルの成果を求められる機関であることに鑑み、自己評価をより厳格に実施したことは適切であり、今後、評価結果のフィードバックにより、更に高いレベルの研究開発成果が期待される。昨年度までの評価指標でも「国際的ベンチマークに照らした研究開発の成果」と明記されていたにもかかわらず、ときとして甘い評価が散見されたが、今回、トップダウンにて評価が是正されたため、今後に期待したい。 ● JAXA は世界レベルの成果を求められる機関であることに鑑み、自己評価をより厳格に実施したことは適切であり、今後、評価結果のフィードバックにより、更に高いレベルの研究開発成果が期待される。特にプロジェクトが設定されている小項目では、今後の研究開発に際してはプロジェクトの重みを考慮した戦略的な推進体制への転換が期待される。 ● 世界の標準に照らして顕著な成果か否かを評価するのであれば、各国の開発が競合している分野、たとえば再使用ロケットや衛星間光通信などについては、「日本の技術に独自のものがあり、優位性を持つ可能性がある（いわゆる勝ち筋がある）」、「日本として持たなければならない技術なので、各国と競合しても独自に開発を行う必要がある」など、技術開発の位置づけが必要ではないか。なお、「I.1.2 地球観測・通信・測位」の分野において、JAXA として注力する「重点テーマ」を特定したことは評価される。 ● 2025 年度評価は「着実な業務運営がなされている」とほぼ評価できれば「B (b) 評価」とすると理解した。 ● 宇宙産業は我が国の成長戦略上重要な分野であり、研究開発成果の社会実装・産業化に向けた取組が着実に進展していることを評価したい。			

- みちびき 5 号機の打上げ失敗は残念であったが、宇宙開発というフロンティア領域では挑戦に伴うリスクを完全に排除することは難しい。今回得られた知見を今後の開発や運用に活かし、着実な再起につなげることを期待したい。
- Today' s Earth の高度化およびグローバル化に対して大いに期待している。衛星データのオープン&フリー化や幅広い産業でのデータ利用促進、高精度測位サービス・衛星通信サービスを利用した地上でのビジネスの促進のためのさらなる積極的な取組が期待される。
- ETS-9 の打上げ準備完了見込みとのことで、競合技術の進展に伴い、時宜を逸さずに実証を進めることが特に重要である。
- 「I.1.3 宇宙科学探査」については、2026 年度以降 MMX 等重要なミッションが連続する。組織、人員等遺漏のないように準備すべきである。
- 「I.1.5 宇宙輸送」の自立飛行安全システムに関しては、優れた技術であり、日本の民間宇宙輸送サービスへの技術指導等を図るべきである。また、H3 ロケットの次の宇宙輸送に関しても、世界のロケット打ち上げ件数の増加の現状を踏まえ、方向性を検討すべきである。
- 米国などの外的要因により、ゲートウェイ計画の見直しなどが行われる中、地球低軌道・月面における有人活動に関しては、日本として守るべきミッション、人的貢献などをしっかりと確保することを期待する。
- 社会から注目されるミッション、社会を支えるミッションなど、日本にとって重要性が高まっているプロジェクトが目白押しであり、それぞれ信頼性を高め、透明性を持って進められることを期待する。特に、「I.1.5 宇宙輸送」については、H3 ロケット 8 号機打上げ失敗からの信頼回復の途上であり、日本ならではの「売り」を創出することを目指しつつ、着実に成功を重ねていくことを目指して欲しい。
- 成果を継続的に創出していくためには、研究開発基盤そのものの維持・強化が重要である。老朽化した施設・設備への対応については昨年度も課題として認識しており、安全・安心な実験・研究環境を維持するためにも、計画的かつ着実な対応を進めていただきたい。
- 宇宙システムの重要性が高まる中、サイバーセキュリティは研究開発及び運用を支える基盤的要素である。施設・設備の更新やシステム開発・運用において、セキュリティ・バイ・デザイン及びレジリエンス強化の取組を引き続き着実に進めることを期待したい。
- 今後も持続的な成長を実現するため、研究開発基盤、人材、体制、施設・設備及びサイバーセキュリティへの継続的な投資を是非とも期待したい。
- 来年度以降は、例として愛称がある場合の衛星名は、初出の際の記載は「先進レーダ衛星「だいち 4 号 (ALOS-4)」」のように記載し、2 回目以降は「だいち 4 号」と愛称で記載すること。「はやぶさ」の事例を思い出して欲しい。ブランディング戦略の認識の欠如である。
- 衛星関連においては技術開発と利活用が分断されてしまっている印象を受けるものもあるため、双方の接続をよりクリアにしながらご説明いただけるとより良い成果報告となると感じた。

	令和7年度業務実績評価			
I.2.官民共創での宇宙利用拡大及び産業振興に資する研究開発等の取組	自己評価	B	部会意見	B
	自己評価は適切である。 従来の複数のプログラムを再編統合しワンストップで行う JAXA 宇宙技術実証加速プログラム（JAXA-STEPS）を新設した点や、これまでの JAXA ベンチャー支援制度を拡充した JAXA スタートアップ支援制度を新設した点などの取組は評価できる。特に、JAXA が技術や知見を社会実装につなげるハブとしての役割を果たしている点を評価したい。また、超小型衛星2機の打上げは未達であるが、QPS-SAR 等に関して進捗があり、「B 評価」は妥当である。 <翌年度以降に向けた課題・指摘事項> ● 新規民間事業者の発掘、すそ野拡大に引き続き積極的に取り組むことが望ましい。 ● 宇宙利用の拡大に伴い、多様なプレイヤーが入り組む「サプライチェーン」も複雑化していくことから、技術移転やデータ利活用の点も留意したセキュリティ確保にも継続的に取り組むことを期待したい。 ● 出資及び人的・技術的援助の取組は大いに進めて頂きたいと考える。一方で、モニタリング指標としての「実施件数」は必ずしも多ければよいものではなく、モニタリングにおいて適切なリスク管理やタイムリーな EXIT 検討が行われているのかも踏まえた評価をお願いしたい。またヒアリング時にもやりとりがあったが「企業価値の成長率」は指標として適切か検討の余地があると思われる。企業価値自体さまざまな考え方があり、また企業の成長ステージやアセット内容、資本構成等によっては一律に判断が難しいケースも考えられるため、もう少し客観的で外部説明もしやすい評価指標の採用も検討して欲しい。 ● 多数の民間事業者が宇宙分野に参入していることは本項目の取組の成果と言ってよいが、こうした取組を始めてから既に相当な期間が経過していることに鑑み、新規参入した事業者が商業的に自立できたか否かの評価を検討すべきである。モニタリング指標に掲げられている「出資先等の企業価値の成長率」をどのように評価するのかの検討が望まれる。 ● 評価指標が他のものより難しい領域かと思うので、適宜必要な見直しや濃淡の検討をしていただきたい。			

	令和 7 年度業務実績評価			
I.3. 宇宙戦略基金の活用	自己評価	B	部会意見	B
	自己評価は適切である。 I 期、II 期ともに、現在は造成フェーズであり、目標とされている成果創出までは時間がかかる。宇宙戦略基金の運営基盤整備及び支援体制構築が着実に進められており、「B 評価」は適切である。 <翌年度以降に向けた課題・指摘事項> ● 人員について、これまで R&D の当事者だった職員がファンディングに従事することになり、専門人材としての育成について考慮すべきである。 ● 予算枠に引きずられることなく、コストパフォーマンスも考え、必要な額を精査して、基金の運用を行ってほしい。 ● 新規民間事業者の発掘、すそ野拡大に引き続き積極的に取り組むことが望ましい。 ● 今後は資金配分だけでなく、採択事業の成果創出や事業継続性、技術開発の継続性やサプライチェーンの健全性を含めた継続的なモニタリングを期待したい。 ● 成果の刈り取りはこれからになると考えるが、巨額の公的資金を投入する枠組みであり、今後、JAXA の支援体制、目利き力などが社会から問われることになる。体制の整備も進められていると思うが、今後、それぞれのプロジェクトが具体的に動き始めると、さらに JAXA への期待は大きくなると思う。それらを見通した体制の整備、強化を進めていただきたいと考える。			

	令和7年度業務実績評価			
I.5. 宇宙航空政策の目標達成を支えるための取組	自己評価	B	部会意見	B
自己評価は適切である。 国際協力については、急増した国家元首/大臣/副大臣クラスの視察の全てに適切に対応していることや NASA の新探査計画発表イベント “Ignition” において、与圧ローバーが新探査計画の中心的プロジェクトとして大きく取り上げられたことは高く評価できる。社会の理解増進及び次世代を担う人材育成への貢献については、大阪万博の成功は非常に重要な成果であり評価できるが、次世代人口が大幅減少しつつある状況下であり、将来的な JAXA 人材の確保の重要性もふまえて、今後もこれまでのアプローチのままではいかには検討する必要があると思われる。その他のプロジェクトマネジメント、情報システム運用、施設・設備管理については、着実に実施されており、総合的に勘案して「B 評価」は適切である。 ＜翌年度以降に向けた課題・指摘事項＞ ● 宇宙システムへの依存度が高まる中、情報セキュリティ、人材確保及び組織レジリエンスの強化は今後ますます重要になると考える。継続的な体制強化を期待したい。 ● 「I.5.1 システムズエンジニアリング／プロジェクトマネジメントの推進及び安全・信頼性の確保」のプロマネについて、審査会の品質向上のための文書作成は好事例である。今後、教育教材等に発展させる余地がある。H3 ロケット 8 号機の喪失に関して、今後の原因究明の中で、マネジメント的な視点で問題等の有無について検証が必要。 ● 民生部品 (COTS 品) の宇宙利用は、LEO コンステレーション衛星などの低価格、短納期の衛星搭載機器では、ますます一般的になってくるので、是非、国際的な連携のもと、推進してほしい。 ● グローバルな視点での評価を標榜するのであれば、他の類似機関（例えば ESA）とのベンチマークを示すべきではないだろうか。 ● 米国にアルテミス／ゲートウェイ計画はだいぶ振り回されているが、日本として核心の部分はしっかりと確保することが求められている。 ● 「I.5.3 社会の理解増進及び次世代を担う人材育成への貢献」について、万博を普段リーチできない層への広報の成功として取り上げているが、その結果が本当に社会の理解増進や次世代人材育成に繋がるのかは精査すべきだと思う。特に次世代人材の育成については、もっと地道で堅実な方法があるようにも思われる。 ● 「I.5.3 社会の理解増進及び次世代を担う人材育成への貢献」について、大阪・関西万博での成功や、積極的な体験型学習機会の提供等、素晴らしい成果であると存じます。一方で、次世代人口が大幅減少しつつある状況下で、今後も同様なやり方でよいのか、中長期的				

見据えた抜本的な対策が必要であると感じます。

- 「Ⅰ.5.3 社会の理解増進及び次世代を担う人材育成への貢献」について、ALL JAXA 100 名体制で万博を実施したとのことであるが、この知見を組織内で有効に活かすことを考えるべきである。
- 「Ⅰ.5.3 社会の理解増進及び次世代を担う人材育成への貢献」は、今年度も評価が甘いという印象を受ける。評価軸は、本項目の取組を通じて「Ⅲ.1 項からⅢ.4 項までにおける取組の成果の創出等に貢献できているか」と設定されており、単に宇宙開発の意義や成果を社会に周知・広報すればよいということではないはずである。たとえば、打上げに成功すれば「よかった」、失敗したときは「残念だった」というだけではなく、「失敗を重ねることが大きな成功につながる」「打上げの成功は喜ばしいが、米国の打上げ回数は桁違いに多い」といった情報も適切に広報し、わが国の宇宙開発がより効果的な形で推進されるための議論を醸成すべきではないか。
- 「Ⅰ.5.3 社会の理解増進及び次世代を担う人材育成への貢献」について、万博等を通じた認知拡大は顕著な成果である。今後は、認知の広がりを次世代の継続的な学習や進路選択につなげる観点から、育成の中長期的な効果を把握する指標の設計を期待したい。
- 「Ⅰ.5.3 社会の理解増進及び次世代を担う人材育成への貢献」について、JAXA が主体的に関与、主導する「宇宙科学と技術に関する国際シンポジウム（ISTS）」をもっと積極的かつ有効に利用して、日本技術情報を広く海外に発信すると共に、世界の宇宙関連機関、民間企業との交流・協議・共創の場として活用することが望ましい。
- 「Ⅰ.5.3 社会の理解増進及び次世代を担う人材育成への貢献」について、取り組みが数年かけて成果が表面にでてくる性質があるため、単年度で評価することが難しい。長期的に数字を見てその変化を見ながら取り組みを評価するという視点が必要。何を成果指標としてどのように評価するかについて検討が必要だと思われる。
- 重大インシデントがゼロで当然とみなされる分野であるため、関係部門の方々のご尽力に感謝する。国家安全保障・経済安全保障の観点から益々の対策強化が求められる中、引き続き万全の対応を期待する。
- 「Ⅰ.5.4 情報システムの活用と情報セキュリティの確保」について、ランサムウェア等を想定した復旧訓練による復旧目標時間の実測、長寿命の宇宙機を前提とした暗号方式の見直し、研究データの機微度に応じた分類に基づく監視など、施策の整備にとどまらず実効性を検証する取組を期待したい。
- 「Ⅰ.5.5 施設及び設備に関する事項」について、老朽化した施設、設備に関しては、しっかりと行ってもらいたい。2025 年度の年度計画、実績では、具体的な施設、設備更新の記述がなされていないように思われる。
- 「Ⅰ.5.5 施設及び設備に関する事項」の老朽化した施設・設備について、安全性と研究継続性の観点からリスクに基づく優先順位づけを行い、計画的な更新を進めるとともに、省人化・自動化の取組にあたっては設備の安全監視の質を確保することを期待したい。

	令和 7 年度業務実績評価			
Ⅱ. 業務運営の改善・効率化に関する事項	自己評価	B	部会意見	B
	自己評価は適切である。 業務改善及び効率化に向けた取組は着実に進められており、「B 評価」は適切である。 ＜翌年度以降に向けた課題・指摘事項＞ ● 額は少ないとのことであるが、独自自己収入の増加に関する事項に関して定量的に次年度以降記載すべきである。 ● 人件費に関して、ラスパイレス指数が 2018 年に比べて 2025 年では大きく減少し 1 に近づいていることを成果としているが、近年の円安、JAXA として国際競争力の確保の観点から、果たして、この状況は望ましい事なのかどうかは、今後の判断が分かれる。なお、ラスパイレス指数が評価軸として記載していないのにも関わらず、業務実績の指標として出てくるのは疑問であり、特に顕著な成果の基準を世界レベルの比較に変更するのであれば、人件費についてもグローバルな指標を採用することを検討した方がよいと思われる。 ● JAXA と取引した事業者が不適切な行為を行ったとして競争参加資格停止処分を受けたことが公表されており、当該行為が行われた時期は本評価対象時期を含むとされている。JAXA 側で、入札において問題がなかったか、より早期の不正行為を発見することができなかったか等、事実関係の検証が必要であると思われる。 ● 効率化と安全性・セキュリティ確保の両立が重要であり、特に重要システムについては過度な効率化によるリスク増大を招かないよう留意されたい。 ● JAXA の要員問題は今後宇宙利用が広がることを考えると、非常に重要になると考えています。人件費の増額分を定員増に活用する方向性を説明いただきましたが、JAXA の各所では人手不足が慢性化していると思います。長期的な視点に立った要員確保を進めていただきたいと思います。			

	令和 7 年度業務実績評価			
Ⅲ. 財務内容の改善に関する事項	自己評価	B	部会意見	B
	自己評価は適切である。 財務内容の改善に向けた取組は着実に進められており、「B 評価」は適切である。 ＜翌年度以降に向けた課題・指摘事項＞ ● 老朽設備更新や情報セキュリティ対策等、将来のリスク低減に資する投資については中長期的視点から継続的な確保を期待したい。			

	令和 7 年度業務実績評価			
Ⅳ. その他業務運営に関する重要事項	自己評価	B	部会意見	B
	自己評価は適切である。 内部統制及び人材マネジメント等について必要な取組が進められており、「B 評価」は適切である。 ＜翌年度以降に向けた課題・指摘事項＞ ● 「年度計画」には考え方や方向性が記載されているのみで、具体的な工程表に当たる記載がない。「業務実績等」において、「内部統制の運用見直し」などの具体的な事項が記載されている。計画どおりかどうかの判断が困難である。 ● 近年のサイバー脅威やサプライチェーンリスクの高まりを踏まえ、組織全体としてのリスクマネジメント及びインシデント対応能力の向上を継続して進めていただきたい。			

法人全体を通した評価に関する御意見	● JAXA の自己評価結果に関しては、第 5 期の初年度にあたり、より厳格な評価を実施したとのことで、自らを律する姿勢には敬意を表する。今回定めた評価基準は、中期計画を通じて変更されないことを要望する。2025 年度は基幹ロケットの不具合等により打上げ件数が減少していることは否めない。一方、「I.1.2 地球観測・通信・測位」「I.1.3 宇宙科学・探査」等の分野で顕著な成果があったことから、全体を通じた総合評定としての「B 評定」は妥当であると考ええる。 ● 評価基準について、標準が「B」とすればよいことは分かるが、「S」「A」の評価基準との差異が明確でないように思われる。 ● 年度計画について、パートによって書き方が異なるが、特に、最後の内部監査は顕著だったので指摘した。「年間計画」が考え方などで、具体的なプロジェクト名もない。「業務実績等」で初めて、プロジェクトや施策名が出てくる。一般論であるが、プロジェクト毎に年度毎に工程表を作るのが通例だと思う。 ● 業務実績等について、全体的に業務実績報告書で初めてプロジェクトの内容が出てくるパートも多々あった。当初予定されていたものかどうかの判断が困難であった。「2022 年度に開始した活動の最終年度として、蓄積した成果を基に実証機会の調整に取り組んだ結果、NASA が公募したアルテミスミッションにおける月面実証ペイロード 2 件のうちの 1 件に月震計の小型震源装置（PASS：JAXA・東京大学）が選定された。（資料 2 55 頁）」は、2025 年度の成果ではなく、2022 年度に発生した事象かと思う。2025 年度の年度計画の達成との関係が明確でないと思われる。 ● 項目 I.1 が大項目になってしまったため、個別の評価ができなくなった点が残念であるが、宇宙輸送を除き、概ね当初計画を上回る成果を上げており、この点は高く評価すべきであると考ええる。また、宇宙戦略基金についても、着実に立ち上げ、特に大きな問題なく、運営を開始した点も評価できると考える。 ● 各大項目の評価が「B 評定」であることが示すとおり、全体としても、着実に目標を達成していると評価できる。個別のプロジェクトに遅れや失敗があることは、それ自体が問題ではなく、それが法人全体としてのプロジェクトマネジメントにおける問題の発現である場合に問題視すべきであると考えるが、この点についても適切に法人内部で取組がなされており、健全な法人運営が行われていると評価する。 ● 日本の基幹ロケットである H3 ロケットとイプシロン S ロケットの打上げ失敗や開発遅れが、JAXA 業務の広範囲に影響し法人評価を下げている。日本の宇宙開発・宇宙政策全般への影響も大きいので、基幹ロケット開発に必要な十分なりソースをかけることが不可欠であろう。 ● 宇宙安全保障、地球観測、宇宙科学、有人活動など各分野において、着実な成果と社会実装に向けた進展が確認できる。特に、国際共同ミッションの立上げや科学観測による世界水準の成果創出など、我が国の存在感を高める取組を評価したい。一方、宇宙輸送分野では打上げ失敗等の課題が生じたが、原因究明と再発防止に向けた対応が透明性をもって進められている点は、フロンティア領域における健全なリスクマネジメントとして評価できる。研究開発成果の最大化と業務運営の両面において、法人全体として着実な取組が認められ、総合評定は適切であると考ええる。
--------------------------	---

	● 宇宙科学・探査については、小惑星アポフィスに対する国際協力による探査計画として RAMSES 計画を ESA-JAXA の共同ミッションとして立ち上げることを実現し、国際的なプラネタリーディフェンス活動において我が国の存在感が増したことは学術面以外としても評価でき、今後の国際競争力向上などの波及効果にも期待したい。
翌年以降に向けた課題・指摘事項等	● 全世界のロケット打上げ件数が 300 件を超える中で、日本としてどのように宇宙分野の実用化を実施するか、官民と JAXA の役割分担等の中で今後の長期的なあり方を考える必要があるように思う。 ● 今回から、評価区分とともに、評価の付け方を変えたとのことで、これまでの自己評価に比べ、「S、A 評価」の数が大きく減り、ほとんどが「B 評価」となっています。これでは、何をやっても「B 評価」ということで、評価を行う必要がなくなってしまうだけでなく、組織も萎縮してしまう可能性がある。少なくとも自己評価においては、よい点があれば評価を高くする、改善すべき点があれば低くするというメリハリを付けた方がよいのではないかとと思われる。 ● 全体として、限られたリソースの中で優れた取組をされていると感じる。貴法人は、「社会の理解増進及び次世代を担う人材育成への貢献」という社会的な使命が（おそらく他の一般的な独立行政法人よりも）かなり強く期待されているため、（ヒアリングでもやりとりがあったが）万博や他の体験型学習機会を通じたアウトカムを、より持続可能なものとする仕組みづくりや、若年人口が減少の一途を辿る中で更なる対策の検討をお願いしたい。 ● 宇宙機関としては各部門において十分に努力していることが窺われるが、国内外において、宇宙開発における商業活動の比重が高まり、宇宙機関の果たす役割が変容してきていることに鑑み、法人自身の役割を、わが国の宇宙政策全般に照らして不断に見直し、JAXA でなければ担うことができない活動を定位していただきたい。 ● 宇宙システムへの社会的依存度が高まる中、成果を継続的に創出する基盤の強化が一層重要となる。とりわけ、老朽化した施設・設備の計画的更新、サイバーセキュリティを含む情報システムの実効性確保、及び高度専門人材の確保・定着は、中長期的な課題として継続的な取組を期待したい。併せて、工学的なリスク管理において培われてきた原因究明と是正の規律を、情報セキュリティやサプライチェーン等の非技術リスクに対しても同水準で適用し、組織全体のレジリエンスを高めていくことを期待する。 ● 人材育成については、様々な項目で取組が挙げられているが、縦割りになっている感是否めず JAXA 全体としての人材育成戦略とその成果が見えにくい。ダイバーシティの推進なども含めて、部署を横断した取組の可能性などについても検討していただきたい。また、男女共同参画に関しては、中途退職者の男女比率なども調査し、職場環境に改善点がないかなども自己点検することが望ましいのではないかと。 ● 他の委員からも意見があったが、今年度から評価を厳しくしたことで従来と評価の仕方に少々乖離があると思うので、適宜各項目の評価指標や評価の観点の更新・見直しなどをしながら進めていただきたい。